

ベルクソンにおける〈運〉と〈偶然〉

——『道徳と宗教の二源泉』の記述を中心に——

土 屋 靖 明

序

ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の『小論集』(*Écrits et paroles*, 1957) の中に、1900年にコレージュ＝ド＝フランスで行われた「講義要約〈アプロディシアスのアレクサンドロス『運命論』について〉および〈原因の観念について〉」(*Résumé par Bergson de ses cours sur le Περί εἰμαρμένης d'Alexandre d'Aphrodisias et sur De l'idée de cause*) なる原稿が収録されている。アプロディシアスのアレクサンドロス (Alexandros ho Aphrodisieus, 2C) は、アテナイでストア学派に対抗して、アリストテレス (Aristotélès, 384-322. BC) の註釈を行った哲学者である。『道徳と宗教の二源泉』(*Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932) の原注においても、ベルクソンは「我々は 1898 年のコレージュ＝ド＝フランスの講義で、アプロディシアスのアレクサンドロスの運命 Περί εἰμαρμένης に関して、この偶然 (hasard) の概念を詳論した」(MR154-155) と、記している。それ故に、ベルクソンはアプロディシアスのアレクサンドロスの運命論に、少なからず関心を抱いていたことが理解されるであろう。

同じく『小論集』に収録されている 1902 年にコレージュ＝ド＝フランスで行われた「講義要約〈アリストテレス『自然学』第二巻について〉および〈諸体系との関係における時間観念の略史について〉」(*Résumé par Bergson de ses*

cours au Collège de France sur le II^e livre de la *Physique* d'Aristote et sur l'*Esquisse de l'histoire de l'idée de temps dans ses rapports avec les systèmes*) においても、ベルクソンは「土曜日の講義は、アリストテレス『自然学』第二巻の説明に充てられた。とりわけ、ギリシアの註釈家たちの解釈を取り上げた。特に運 (Chance) と偶然 (Hasard) についてのアリストテレス理論に重点を置いた」(EP191) と述べている。然るに、ベルクソンがアリストテレスやアプロディシアスのアレクサンドロスらのギリシア哲学者における〈運〉と〈偶然〉の問題について、並々ならぬ関心を抱いていたことが知り得る。

〈chance〉は〈幸運〉の意味で用いられるの対し、〈hasard〉は〈危険〉とも訳されたりする。〈chance〉は〈好運〉を、〈hasard〉は災いや不運を意味している語とも言える。然らば、語義的には、〈chance〉と〈hasard〉とは対極的な概念となるであろう。

〈運〉と〈偶然〉の問題は、西欧の哲学者のみならず、渡仏時にベルクソンと知己を得て、その哲学から強い影響を受けたと言われる九鬼周造 (1888-1941) ら¹⁾、日本の思想家の興味関心を惹くテーマでもある。木田元 (1928-) もこうした問題に取り組んでいて、結びにおいて「…その大部分については依然霧の中である。…そんなこと (勝負事のツキについての解明など) まで分かったら人生味気ないものになるだろう…」とも記しており²⁾、それ自体やはり難題と考えてよいものであろう。

ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch,

八戸学院大学ビジネス学部ビジネス学科

1903-1985) は、ベルクソンにおける「突然性 (La Soudaineté)」について論じている³⁾。ただ、ジャンケレヴィッチは魂の突然変異 (mutation aventureuse de l'âme), 魂の開放 (ouverture de l'âme), すなわち宗教的な回心について論考しようとしたように見受けられ、〈運〉と〈偶然〉の相違を明確化しようとしたものではないように思われる。けれども、ジャンケレヴィッチは、「〈偶然〉 (Hasard) や〈悪〉 (Mal) と同様に〈絶望〉 (Désespoir) も実在しない極限 (limite irréelle) である」と⁴⁾、〈偶然〉というものを〈悪〉や〈絶望〉と同じく極限的なもの、何かネガティブな極限状態と考えている。本稿では、『道徳と宗教の二源泉』 (*Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932) の第二章「静的宗教」 (La Religion Statique) における〈成功への意志〉 (Volonté de succès) と〈偶然〉 (Du hasard) との節にみられる記述に主として着目し、そうした運 (chance, veine) と偶然 (hasard) についての考察を進めて行きたい。

1. 『二源泉』の「成功の意欲」における運 (Veine) —〈幸運〉と〈好運〉—

ベルクソンは『二源泉』の「成功への意欲」 (Volonté de succès) の節で、運 (veine) に関する言及を行っている。

「成功を求める心から迷信が躍り出す様が、目の当たりに見られよう。ルーレットのある番号の上へそばくの金額をおき、球の回転が今まさに停まろうという刹那 (à la fin) に注意して見られるがよい。球がぐらぐらしながらも恐らくはあなたの選択した番号のところに到達しそうになる瞬間に、あなたの手は進み出てその球を押し、続いて、それを止めようとする。この場合、あなたの意志の行った決断 (décision) と期待される結果 (résultat) との間隙を埋めるに違いないのは、あなたの外に投影されたあなた自身の意志である。あなたの意志は、そのようにして突発事 (accident) を駆逐する。さて、

賭博場の常連となり、慣れるがままに任せてみると、間もなくあなたの手が動くようなことはなくなる。あなたの意志は、あなた自身の内部へ引き籠ってしまう。しかし、あなたの意志がその場から立ち去るにつれて、あなたの意志から流出し、あなたの意志から派遣を受けた或る種の実体 (entité) が、後釜に坐る。つまり、運 (veine) というものがそれであり、このものは賭金 (parti pris de gagner) を取ろうという望みの変形物に他ならない。運は完全な人格を備えたものではない。ましてや神性 (divinité) となるためには、より以上のものでなければならない。けれども、運においては、あなたがそれに頼るには十分に足りるだけの、或る要素が存するのである。

矢を的に当てようとして、未開人 (sauvage) が頼みにしようとするものは、この種の力である。長い進化の諸段階を飛び越えてみよう。そうすると、戦士たちに勝利を保証するに違いない都市国家 (cité) の守護神が見出されるであろう。」 (MR146-147)

好運 (chance, veine) とは、何なのであろうか。〈運〉とは、ポジティブ価値、すなわち古典哲学以来の〈真〉、〈善〉、〈美〉という三つの価値とも連関性があるものと考えてよいであろう⁵⁾。ベルクソンはルーレットに球を投げ入れる賭け事を事例に考察を行っている。賭け事においては、期待される結果が得られるとは限らない。結果は全て偶然の産物であり、突発的なものだったりもする。意志の力でもって、ままたぬものでもある。

でも、ベルクソンは、自らの意志の行った決断と期待される結果との間隙を埋め得る可能性を模索し、自分の外に投影された自分自身の意志の力によって、思い通りの結果を得ようと努力する。偶然性や突発事を排除する途を探そうとする。すなわち、神頼みをするのではなく、天事に身を任せるというよりもむしろ、人事でもって万象を操作しようと尽力してみるのである。

自らの意志が自らの内に引き籠ってしまうと、〈運〉は遠のいてしまうとのこと。故に、〈運〉とは意志から流出した何らかのもので、〈運〉を引き寄せるものは、自分の外部に投影された自分の意志の力によるということになる。ベルクソンの文言に従い、〈運〉とは何かと一言で申すと、それは〈後釜に残ったところの自らの意志から派遣を受けた或る種の実体〉ということになる。

ベルクソンは〈運〉というものを、賭金を取りたいという願望の変形物とも表現している。然るに、〈運〉は意志の、意図の、希求する心の所産物である。従って、〈運〉とは、偶然の産物ということにはならない。そこには、先行投資がある。掛金ないし賭金がある。文学的ないし詩的な表現をするならば、そこには前もって支払った授業料がある。それ故に、〈好運〉を、〈幸運〉を手にしようとするならば、それに先立つ代価が必要とされるのである。下積みや忍耐があって手に入り、しかも維持できるものである。先行投資なくして偶然に手に入れたものには、持続性はないということになるのである。そうした意味で、〈幸運〉は努力していなければ向いてこない、掴むこともできなければ、継続させることもできないという事には、何か必然性があるということになるのではなかろうか。

「けれども、物事がうまくはかどるのは、如何なる場合も合理的手段によってであり、原因と結果という機械論的継起に従っているということに注意してもらいたい。ひとはまずもって自力でもって成し遂げようとしてはみる。自分自身の力だけでは如何ともし難いと感じるに至ってはじめて、機械論外の力（*puissance extra-mécanique*）に頼るのである、というは何故ならばそうした力の現存が信じられていて、そうした力のお陰でしないで済むとは感じられなかったような行為のために、最初からその加護（*invocation*）を求めたとしても、変わらないのである。」（MR147）

万事を須らくはかどらせようとする、原因と結果という機械論的な合理的手段によって、すなわち決定論的な秩序を求めようとする。そして、自力本願を志向するのである。しかしながら、自力本願が叶わぬと悟った時、祈り、そして他力の加護を求めるのである。〈幸運〉ないし〈好運〉とは、そうした状況の下で転がり込んでくるものなのであろう。

「しかしながら（機械論的因果性に対して）第二の因果性は、考慮をするだけの値打がある、というのは何故ならば、そこには少なくとも励まし（*encouragement*）と刺激（*stimulant*）があるからである。もし科学が非文明人に標的に命中することを数学的に保証するであろう仕掛けを提供したのであるならば、彼は機械論的因果性だけで満足するであろう（勿論、彼がその凝り固まった思考の習慣を即座に捨て去れると仮定してのことであるが）。このような科学を待望しながらも、彼の行動は機械論的因果関係から引き出し得るものを全て引き出す、というのは何故ならば、彼は自らの弓を引き絞り、狙いを定めているからである。けれども彼の思考はむしろ矢を然るべきところへと導くに違いない機械論外的な原因へと向かう、というのは何故ならば、こうした原因に対する彼の信頼は、確実に的を射当てる武器がないとしても、より良く狙いを可能ならしめる自信を彼に与えてくれるであろうからである。」（MR148）

機械論的因果性に対しての第二の因果性、すなわち〈好運〉ないし〈幸運〉を考慮に入れる価値があるということは、そこには〈励まし〉と〈刺激〉がある、すなわち〈希望〉と〈努力〉の余地があるからである。非文明人、すなわち未開人が科学を知ったら、万象を数理的に解析する機械論的因果性だけで、満悦するであろう。しかしながら、彼等の思考もまた、機械論外的な原因へと向かうことになる。機械論的因果律のみでもっては筆舌に尽くせないものが浮き彫りになってくるからである。〈幸運〉ないし〈好運〉というものも、その一例なのであろう。

「人間の活動は様々な出来事の只中で展開し、それらに影響を及ぼすのと同様にそれらに依存している。こうした出来事は部分的には予見可能ではあるが、大部分は予見不可能である。我々の科学は予見可能な範囲を少しずつ拡大していくので、その極限においてはもはや予見不可能性などは何もないような完全な科学を考える。…彼は自分の掌握している物理的事象に適合する説明体系が、冒険を更に進めて行く場合、全く別種の体系に譲歩しなければならないということを容認できない。」(MR148-149)

科学は、万象を可能な限り解析して、一切を合理的に説明しようと努力する。とりわけ、物理的な自然現象は、そうした科学の格好の探求対象と成り得るものである。科学はまた、人間の諸活動をも、ロジカルに説明し尽くそうとするし、実際に説明可能な範囲も拡大されつつあることは間違いないことである。でも、どこまで行っても、筆舌に尽くせない事象が残ることも事実である。〈好運〉ないし〈幸運〉もまた、そうした論理性のみでもって語り得ない、〈冒険的〉なものなのであろう。

2. 偶然 (hasard) に関する考察—〈災い〉(hasard) について—

「偶然とは、中味が空虚な意図のことである。それはもはや、影 (ombre) でしかない。けれども、そこには原質 (matière) がなくとも、形式 (forme) はあるのである。」(MR155)

〈偶然〉の概念は、〈運〉のそれとは、似て非なるものと言えるであろう。〈偶然〉は中味が空虚で、影ではあって、実体ではない。そしてまた、本質ではなくて、形式なのである。〈偶然〉とは、何か虚無的なもの、何か空疎なもの、何か幻像的なものなのであろう。

「そこに偶然が存在するのは、何か人間的な関心が働いているからでしかないのである、もしくは、奉仕することを目指しているにせよ、或いは害する意図を有しているにせよ、あたか

も人間が考慮に入っていたかのように、事象が起こったからである。瓦を剥ぎ取った風、歩道に落ちた瓦、瓦の地面への衝撃しか考えないとしたら、もはや機械論しか認めはしないであろうし、偶然は消え失せてしまうであろう。偶然が介入するためには、結果が人間的意義を有していて、こうした意義が原因に跳ね返って、人間臭くなるのでなければならない。それ故に、偶然とは機械論があたかも意図を持っていたかのように働くことに他ならない。人は恐らくは次のように言うであろう、その言葉が使われるのはまさしく、事象があたかもそこに意図があるかのように起こる場合であるので、我々は現実的な意図があるとは想定しておらず、反対に全体が機械論的に説明されることを認めているのである、と。」(MR154-155)

〈人間〉というものを考慮の対象としなければ、生起する一切の万象は、ただ単に機械論的に説明されるだけである。在るものは、混沌だけ、カオスだけということになる。〈瓦を剥ぎ取った風、歩道に落ちた瓦、瓦の地面への衝撃〉、それらのいずれも、あるがままに生起する事象以外の何ものでもない。〈瓦を剥ぎ取った風、歩道に落ちた瓦、瓦の地面への衝撃〉、そのような出来事を〈偶然〉と考えることは、人間がそうした事柄に意味を与えるからに他ならない。そこには、人間的な意図が介在するのである。すなわち、〈偶然〉という概念それ自体が、〈人間臭い〉ものなのであろう。〈偶然〉とは〈機械論があたかも意図を持っていたかのように働く〉ことであるならば、機械論的な事象、つまりカオスや混沌と言うべき自然状態が、何かしら意図を有しているのではないかと、勘繰る人間の心が、そこに表象されている、顕現されているのであろう。

「けれども、反省的な思考の下には、自発的で半意識的な思考があり、そしてそれは原因と結果という機械論的連鎖の上に全く異種の何ものかを重ね合わせていて、もとより瓦の落下は説明できないとしても、落下は人の通行と同時

に発生し、まさにその瞬間を選んだことを説明するためのものなのである。選択や意図の要素は、出来る限り残ってはいる。反省がそれを捉えようとすればする程、それは後退する。それは逃げもすれば、消えもする。けれども、それが存在していなければ、機械論としか言えず、偶然ということが問題となることはないであろう。」(MR155)

〈偶然〉という事象を、瓦の落下を例に挙げて説明しようとした場合、どうしてまさにその瞬間に落下したのか、その瞬間に直撃したのかということが問われることになる。落下した瞬間、直撃した事故の瞬間に何か必然性があったのだろうか、と、自問自答してみる。何か意味があって、その瞬間に落下し、直撃したのではないのだろうか。でも、明確な回答は得られない。そこに何か選択や意図があったのではなかろうかと懷疑してみても、思案してみても、なかなか理に適った根拠や説明は見い出せない。然らば、そこに残るのは、機械論だけということにもなる。結局は、〈万象はあるがままなのだ〉と。自然とそうなったのだと。結局のところ、〈偶然〉とは、〈あるがまま〉ということになるのではなかろうか。

結 語

『道徳と宗教の二源泉』の文脈を読んでみると、〈運〉と〈偶然〉とは異質なもので、〈幸運〉ないし〈好運〉と〈偶然〉とは、異種なるものであることが理解できた。〈幸運〉ないし〈好運〉には、何か必然的なものがあると考えさせられた次第である。

〈偶然〉とは何か。ベルクソンは〈偶然〉を、何か機械論的なものと考えている。中身が空虚で、実体のない影のようなもの、形式であっても本質ではない、空疎で、虚無で、幻影的なものなのである。そこに存するのは、単に混沌としたカオスだけということになる。一切は、〈あるがまま〉に生起する事象に過ぎないのである。

そこには、意味などないのであろう。そうした出来事を理でもって説明しようとしても、明確な回答を見出すことは困難となろう。

その一方で、〈運〉すなわち〈好運〉ないし〈幸運〉は、如何に説明されたのであろうか。ベルクソンは〈運〉というものをポジティブ価値でもって考え、〈真〉、〈善〉、〈美〉との連関性でもって説明しようとしている。ベルクソンは、〈運〉というものを自らの意志の行った決断と期待される結果との間隙を埋め得る可能性を有するものと考えようとした。〈運〉とは、自分の外に投影された自分自身の意志の力によって、思い通りの結果を得ようと努力することで、得られるものとされる。偶然性や突発事を排除する途を模索し、神頼みをするのではなく、天事に身を任せるというよりもむしろ、人事でもって万象を操作しようと極力懸命に尽力してみるのである。

自らの意志が自らの内に引き籠ってしまうと、〈運〉は遠のいてしまう。〈運〉とは意志から流出した何らかのものであって、〈運〉を引き寄せるものは、自分の外に投影された自分の意志の力によるものとなる。ベルクソンに従い、〈運〉というものを一言で申せば、それは〈後釜に残ったところの自らの意志から派遣を受けた或る種の実体〉となるのである。

賭金を取りたいという願望の変形物とも表現される〈運〉とは、意志の、意図の、心の希求する所産物である。従って、〈運〉とは偶然の産物というわけではなく、何か必然めいたものがある。そこには、先行投資があり、掛金ないし賭金があり、前もって支払った授業料がある。それ故に、〈運〉を手にしようとするならば、先立つ代価が必要とされる。それは、下積みであつたり、陰徳であつたり、忍耐があつたりもする。それ故に、〈運〉が手に入ることもあれば、維持できもする。先行投資なくしてたまたま手に入れたものには、持続性はないのであろう。そうした意味で、〈運〉は努力していなければ向いてこない、掴むこともできない、継続させ

ることもできないのである。然るに、〈運〉とは、意志の力なくして手にできず、持続もできず、たとえ実力なくしてそれを掴んだとしても、継続させることはできないのであろう。

自力本願が叶わぬと悟った時、祈り、そして他力の加護を求める。〈運〉とは、そうした状況の下で転がり込んでくるものなのであろう。〈運〉を掴むためには、陰徳を積まなければならない。陰徳なくしては、折角手に入れた〈運〉も、程なくして逃げ去ってしまう。〈運〉というものは、陰徳を積んでいると、不思議と、自然と到来し、そしてその下に留まり続けるものなのでもあろう。

註

ベルクソンの原著作は、全て PUF (Presses Universitaires de France) 版を使用した。邦訳としては、白水社全集版、中央公論社『世界の名著』版、岩波文庫版を適宜参照させて頂いた。

・ *Écrits et Paroles*, 1959…EP (花田圭介・加藤精司訳『小論集 I』)

・ *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932

…MR (森口美都男訳『道德と宗教の二つの源泉』・平山高次訳『道德と宗教の二源泉』)

- (1) 九鬼周造『偶然性の問題』, 岩波書店, 1935 年。
- (2) 木田元『偶然性と運命』, 岩波書店, 2001 年, 203 頁。
- (3) Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, pp. 184-188. ウラジミール = ジャンケレヴィッチ『アンリ・ベルクソン』阿部一智・桑田禮彰訳, 1988 年, 新評論, 251-256 頁。
- (4) *Ibid*, p. 246. 同上, 334 頁。
- (5) 中田光雄『ベルクソン哲学—実在と価値—』, 東京大学出版会, 1977 年, 123-124 頁。

[付記] 本稿は、2012 年 9 月 29 日 (土) に東京大学本郷キャンパス法文 2 号館 2 階の文学部思想文化学科哲学研究室において開催された第 32 回ベルクソン哲学研究会において口頭発表した原稿を、加筆修正したものである。研究会の会場において、御意見御質問等を頂戴した全国のベルクソン哲学研究者の皆様方、東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻の研究室の皆様方には、この場を借りて、謝辞を述べたい。